

ふたごの自閉症児をもつ母親の養育行動を高める支援

ートイレット・トレーニングの行動コンサルテーションを通してー

○石坂 務¹ 渡部匡隆²

(横浜市立本郷特別支援学校¹ 横浜国立大学²)

Key Words: 自閉症スペクトラム 保護者支援 トイレット・トレーニング

I. 問題と目的

自閉症児・者をもつ親のストレスは他の障害のある児の親に比べてストレスが高いことが知られている。長期間療育の中心である親をどのように支援するかは、自閉症児支援の重要な要素である(河野, 2014)。本事例では双子の自閉症児をもつ母親が、行動コンサルテーションをもとにトイレット・トレーニングを行った。コンサルテーションを通じた母親の児らへの指示行動の機能の向上や、児らの子どもの日常生活についての的確な実態把握の効果の検討を行うことを目的とした。

II. 方法

1. 対象：来談時6歳10か月の自閉症スペクトラムのある双子の男児(以下A児、B児)の母を対象とした。家族構成は、小学校特別支援学級に通うA児、B児と30代の父母であった。宿泊学習では布パンツをはいて生活できるなど、環境設定によってはトイレで排泄ができるが習慣化しておらず、家庭及び学校でおむつをつけた状態で生活していた。家庭では大半の時間を、寝転がりながらタブレットを鑑賞し、そのままおむつの中に排泄をしていた。児らがその場に脱ぎ捨てたおむつを母が捨て、新たなおむつを履かせていた。父は児らと一緒に遊ぶ機会を設け、同じ部屋で就寝するなど、子育てに協力的だが、障害に対する理解は乏しく、児らを叱りつけることが多かった。

2. 面接期間・場所：平成28年10月より平成29年3月までであった。原則として週1回計9セッション、C大学において児童への指導と並行して母親への面接を行った。

3. 標的行動：トイレット・トレーニングのコンサルテーションを通じ、母親の、家庭での児らに対する指示行動を高めるやり取りの計画・実行を標的行動とした。

4. 支援当初の様子：A児、B児は日常生活上のこだわりが強く、母親は適切な行動へ導く指示行動が、児らの抵抗により弱化されていた。その経過から、両児ともおむつをつけたまま生活していた。また、学校でのトイレ指導は行われていなかった。

5. 手続き：母親からの聴取をもとに、第一筆者がトイレ指導に関する情報の整理や指導法の提案を行った。12月24日以降は、母がトイレ指導の計画を立案し、家庭で計画を実行した。実行結果は母が記録し、面談でフィードバックを行った。第一筆者は母の適切な計画実行に対し言語賞賛等、強化を行った。

III. 結果

10月、11月の面談でのやり取りから、母はスケジュールや絵カードを導入するなど、障害に対する知識は学んでいる様子が見られたが、育児の経過で、両児からの激しい抵抗があり、その結果、大人しくしているからという理由で、母は指示を極力控えていることが分かった。面談の初期に母主導でトイレ指導を行った。児らが取

り組みのメリットを実感できるよう、トークンエコノミー法を用いて、10個たまったらバックアップ強化子が得られるスケジュールを立てたが、スケジュールが長く定着はしなかった。

11月26日に、トイレの実態把握の記録を依頼した。12月10日からはトークンエコノミーをポイント制で再度設定した。ポイントは「トイレに入る」が1P、「性器を便器前で露出する」が2P、「排尿する」が3Pであった。トークンエコノミー設定後は一時ポイントがたまっていたが、バックアップ強化子が供給されると再びトイレに行くことが少なくなった。

クリスマスプレゼントにポータブルゲーム機を購入し、その使用について、母主導でチケット制を取り入れた。排尿するごとに30分のチケットを得られる仕組みを設定したところ、以後トイレの頻度が向上した。排尿だけでなく、排便やパンツを履く時間の設定なども実行することができた。

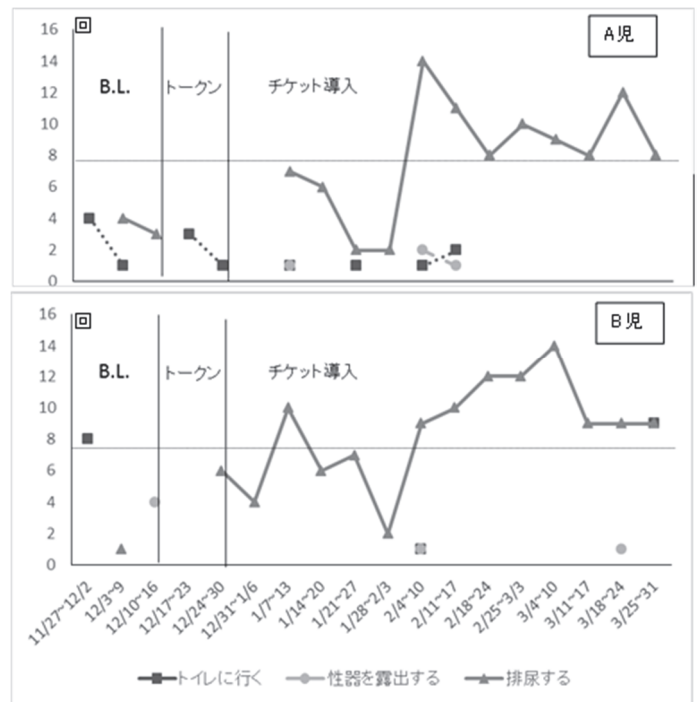


図 A児・B児のトイレ指導の状況

IV. 考察

家庭において、母主体でトイレット・トレーニングを計画し、トイレで排泄を行う頻度が向上した。その他の面においても、母主体でA児、B児のタブレットの管理についても、ルールを明示し取り組むことや、B児の偏食に対して、スモールステップで食を広げる取り組みをすることができるようになった。

一方、A児、B児ともに、未だおむつからパンツへの完全移行までは至っていない。段階的な時間の拡大が今度の課題である。

(ISHIZAKA Tsutomu, WATANABE Masataka)